

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：34426

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380723

研究課題名(和文) 戦前における労働者スポーツに関する歴史社会学的研究

研究課題名(英文) A Study about Physical Education in Factories on the Pre-War- From the Perspective of Historical sociology -

研究代表者

高井 昌史 (TAKAI, Masashi)

桃山学院大学・社会学部・准教授

研究者番号：20425101

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：戦前期、日本の工場においてバレーボールは女子工員のレクリエーションスポーツとして普及した。バレーボールは、適度な運動として、女子工員が生産能率を上げるために導入されたものであり、日本では「女子に向けたスポーツ」とされていた。だが、呉海軍工廠バレーボールチームは、戦闘的で「男らしい」バレーボール文化を生み出し、全国の競技大会でも輝かしい成績をおさめていた。一方で、「男らしい」バレーボール文化の隆盛は、呉海軍工廠内での「労働運動の低調さ」ともパラレルな関係にあった。すなわち、そこには「男らしい」スポーツ文化と、支配階級に従順な労働者階級の文化が、同時に存在していたのである。

研究成果の概要(英文)： In the pre-war period, volleyball spread as a recreational sport for female factory workers. Volleyball was introduced as a suitable exercise and for increasing the production efficiency of women workers and it was considered a "sport suited to women" in Japan. However, the Kure navy yard volleyball team created a volleyball culture that had a "manly" fighting spirit, and was successful in national competitions. On the other hand, the prosperity of the "manly" volleyball culture had a parallel relationship with the "sluggishness of the labor movement" in the Kure navy arsenal. In other words, there was coexistence of a "manly" sports culture and dominant class and a submissive worker class culture.

研究分野：社会学

キーワード：工場体育 ジェンダー 社会運動 バレーボール

1. 研究開始当初の背景

(1)申請者はこれまで、主にスポーツとメディア、大衆文化の関わりについて、文化社会学・歴史社会的な関心を抱いており、とくに近年は戦前から戦後にかけての健康優良児言説や戦跡ツーリズムにおけるナショナリティ・ジェンダーポリティクスについて、研究を進めてきた。その成果は、高井昌史『健康優良児とその時代』(2008年)、高井昌史・谷本奈穂編『メディア文化を社会学する』(2009年)、高井昌史編『「反戦」と「好戦」のポピュラー・カルチャー』(2011年)にまとめている。

(2)その過程で健康優良児言説やナショナルな欲望のみならず、戦前および戦後におけるスポーツと工場体育、ジェンダーや労働運動などとの結びつきに関心を抱くに至り、本研究課題を構想するようになった。

2. 研究の目的

(1)大正時代から戦後における工場労働に着目し、その代表として工場体育の歴史的意義を考察する。これまでのスポーツ史の研究は学校体育や競技スポーツが主たる研究対象になっていた。本研究では、工場労働者のスポーツ実践に焦点を当て、そこにみられるキリスト教(プロテスタント)の布教活動(YMCA・YWCAなどの実践)、ジェンダー(工場の男性労働者と紡績工場の女性労働者)階層のポリティクス(労働者の社会階層と、工場内でのヒエラルキー)を検証する。

(2)工場経営者の思惑や時代変容・社会背景も考慮し、それらを総合したうえで、戦前における大衆スポーツとしての工場体育の実態、それが変容していく過程、およびその繁栄の要因を明らかにする。

3. 研究の方法

(1)戦前の工場体育に関連するスポーツ思想・政策などの資料を収集し詳細な分析を加え、戦前の労働者スポーツに関して多方面から知見を得る。全国の図書館や工場(厚生課)国立国会図書館、地方図書館、役所、YMCAなどに赴き、資料を大量に収集・閲覧した。具体的には、工場スポーツ、プロレタリアスポーツ、旧海軍工廠や繊維工場、キリスト教関連の新聞・雑誌、体育史、関連の資料などを入手・閲覧した。

(2)具体的には大正時代に輸入されたバレーボールを中心に、既述の資料を入手しつつ同時並行的にそれらを読み解いた。そして、工場体育のジェンダー性(良妻賢母教育)と当時の「労働運動」を主たる分析基軸とし、工場内外における「ヒエラルキー」「男らしさ」などの絡み合いを解きほぐしながら統括した。加えて、戦前の労働者スポーツを歴史社会的に統合し、時系列的な変容を検証した。

4. 研究成果

(1)「工場スポーツ」といってもその種目

は多種多様であるが、比較的多く発見できたのが工場体育としてのバレーボールの導入・実践・意味づけなどに関する資料である。これらの資料は男女かかわりなく(YWCA・繊維工場や、戦前の海軍工廠など)発見できたため、上記を中心にして研究を進めた。

明治の後期には、工場労働者、とりわけ女子工員のあいだで社会体育を普及されるべきという意見がしばしば現れていた。1910年代以降、紡績会社でもバレーボールを中心とした新しいスポーツが行われるようになった。だが、基本的に戦前の工場の女子バレーボールは、学生スポーツのように「競技化」されることはまれだった。その理由はいくまでバレーボールが、保健、衛生的見地において奨励されたからである。すなわち、企業経営者にとっては、あくまで女子工員の健康管理が主な目的であり、低レベルのスポーツにとどまらせておきたかったのだ。したがって、経営者は、女子工員のバレーボールが全国大会出場などにエスカレートし、競技化するのを好まなかったのである。

(2)大正時代の後期になると、女学校ではなく企業内で女子に教育を与え、教養を高めたうえで、企業が責任を持って嫁にふさわしい女性を育てるという風習が一般化していった。とくに1929年の工場法改正以降、ほとんどの場合、女子工員は尋常小学校卒以上の学歴が義務づけられ、紡績会社の福利厚生も充実していく。そのような流れのなかで、企業内の工場体育・レクリエーションの一環としてバレーボールが採用されることになった。一方で、1920年代半ばごろから、紡績工場には女学校的な教育が導入されたのだが、そもそも明治以降の女学校は「良妻賢母」教育を中心にすえていた。それによって、女子工員は「労働者としての女性」というだけではなく、「良妻賢母になるための基礎や教養を授けられた女性」という側面が生まれてきたのだ。さらにそこには、「女性らしい身体」「子どもを産む身体」を養うという要素も加わっていたのだ。

一方で、女子の工場バレーボールが競技化していく萌芽もみられたことは、忘れてはならない。とくに、1930年代の半ば以降には、工場の強豪チームがいくつか現れる(鐘紡、日紡、広島専売女子バレーボール部など)。彼女たちの身体は、まさしく「良妻賢母教育」「女性らしい身体」「子どもを産む身体」という趨勢にあらがうものであり、「競技するための身体」と言えるものだった。さらに、それは「競技スポーツ=学生」という階層性に抵抗するものでもあったのである。

(3)ここに「労働運動」という視点を加えてみると、どのようなことが言えるのだろうか。明治期から女子工員たちの大規模な労働争議は起こっていた。だが、女子工員を男子工員と比較すれば、争議を起こしにくい面は

否めなかった。なぜならば、彼女たちは基本的に若年労働者であり、15歳から20歳位までの年齢が最も多かった。しかも、2年から3年の短期間労働を終えると、多くの女子工員たちは農村へと帰ってしまうため、運動が定着することは極めて困難だったのである。さらに、1920年代半ばになると、女子工員への福利厚生は徐々に充実したものになっていた。経営者にとって危険思想とみなされていたものに対しても、男子工員と比較して、執着心が小さかったと考えられる。したがって、女子工員の労働運動は、相対的にみれば、男子工員よりも経営者にとって脅威ではなかった。したがって、資本家にとっては、女子よりも男子工員の思想、社会運動に対応することが急務になっていたのである。

それでは、各工場は男子行員たちにどのように対応したのか。ここで大きな意味を持つのが工場スポーツだった。スポーツは工場において身体の訓練に利用される事が多く、とくに男子工員にはその傾向が強かった。例えば、大正から昭和初期に工場経営者に対して行われた調査(「あなたの工場の男工手を訓育するために、どのような主義や方針をもっていますか。そして、それを具体的にどのような方法で実行していますか」)によると、その回答としてスポーツ活動を挙げている工場がしばしばみられたのである。

(4) 戦前期、工場の男子バレーボールは、他のスポーツに比べて低くみられる、あるいは「女のためのスポーツを男がしている」と厭しめられるような傾向があった。そもそも、日本においてバレーボールは女性に適したスポーツという認識からスタートしたからである。しかしながら、女性中心、あるいは工場のレクリエーション中心という趨勢に抗うようなバレーボール文化がなかったわけではない。すなわち、学生エリートの競技スポーツが全盛の時代だったにもかかわらず、労働者文化から生まれ、さらに男性が中心となった「男らしい」競技バレーボールである。その工場スポーツの事例として、広島県の呉工場バレーチームが挙げられる。

戦前、日本には横須賀や、佐世保、呉などに「海軍工場」があった。海軍工場は海軍が使う兵器をつくるための大工場群であり、なかでも呉工場は東洋最大の規模を誇っていた。そこで独自のバレーボール文化をつくりあげたのは、小学校卒の男子見習工員たちである。そもそも、明治から大正時代に至るまで、海軍の工場で働く者も含め、有技職工たちの階層はきわめて低いものだった。彼らは長崎三菱、佐世保、呉などの工場へ入退廠を繰り返し、自らを「流れ者」と蔑称していたようである。例えば練兵場の端に「牛馬と職工は通ってはならない」との札が立てられていたように、大正時代ごろまで世間では牛馬と同等扱いという明らかな差別意識が存在していた。しかしながら、1918年、呉工場

に大きな転機がおとずれる。職工たちはこれまで見よう見まねで技術を習得していたのだが、工場は職工教習所を設置し、工員の定着や技術水準の向上を目指すようになったのである。それに伴い、職工教習所で学ぶ働くことを目指し、入廠試験のために勉強する少年や青年たちが現れてきた。彼らは、旧制中学校に進学できる余裕のない、貧しい家庭の出身者だった。だが、見習工たちは見習科を卒業しても基本的に工員であり、階層的に上昇するわけではなかった。学歴として旧制中学卒程度とみなされるわけではなかったし、旧制中学以上の卒業生と比較して、社会的には低いポジションに置かれていた。

一方で、彼らは自分たちが置かれた状況のなかで、すなわち技能職のなかで出世を目指すことは可能だった。工場では、工場長をピラミッドの頂点として、高等官(武官・文官)、中間管理職の判任官、非管理者としての工員がいた。しかも、工員のなかにも、工手・職手・組長・伍長・並工員といった階層があり、実際には伍長以上は多数の工員の管理に参画していた。見習工出身者の登竜門は海軍技手養成所(技手は判任官にあたる)だった。さらに、高等工業学校(広島高等工業学校や熊本工業高等学校など)に選科生として進むという可能性も残されていた。選科生たちは高等教育機関で学びながら、技手養成所の練習工と同じだけの給料・旅費が支給されたという。すなわち、見習工たちが競争し、勝ち抜いた者が昇進していくというシステムがつくられていたのである。

(5) 例えば、呉工場内のバレーボールチームの対抗戦で歌われていた応援歌がある。曲名は「戦いの歌」である。「苦汁深慮の十星霜 悲憤にむせぶ十春秋 男ならこそ名に泣けど されば男ならばこそ ああたたか わんかな たたかわん わが砲煩の名のもとに」。呉工場内のバレーボールチームは、最盛期で70チームあったと言われている。1932年、全日本排球選手権大会に出場し、師範学校のOBチームや神戸高商などを破って日本一に輝いた。とくに、当時の神戸高商は、1924年から8年連続で不敗をほこっていただけに、学生中心の競技バレーボールに風穴をあけたとも言える。その後、1933年の明治神宮大会で初優勝し、1935年の同大会でも優勝した。ここでは、工場内でバレーボールがレクリエーションから、戦いを意識した「男らしさ」の文化へ変容していった様子が明確に浮かび上がっている。「バレーボールは女子のスポーツ」と世間で認識されていたなか、工員たちは自ら「男らしいバレーボール」という文化をつくりあげたと言える。

では、このようなスポーツは、当時全国的に盛んだった労働運動とどのような関係をもっていたのだろうか。まず、呉工場では明治時代の後半から、スポーツが非常に盛んだった。野球やテニスなど試合がしばしば行わ

れ、相撲大会なども頻繁に開催されていた。ちなみに、スポーツが盛んなこととパラレルな関係にあったと思われるが、呉工廠では入廠試験において最低限の体格が要求されていた。1918年、見習工への入試が開始されて以降、学力試験だけではなく、身長、体重、胸囲などの項目で最低水準が設定されており、それを満たさなければ「不合格」とされたのである。この点も、呉工廠のスポーツが発展した一因と考えられるだろう。次に、大正時代から昭和初期を中心にして、労働者が置かれていた社会環境に目を向けてみたい。1912年、呉工廠ではほとんどの職工を巻き込んだ大規模なストライキが発生したのだが、一斉検挙によって即座に鎮圧されてしまった。その後、労働運動の主流は工廠外へと移り、街頭型、そして市民運動型へと転じていった。それ以降、呉工廠の労働運動は長きにわたって低調な状態が続いた。工廠当局の厳しい取り締まりもあって、1919年に発足した「呉労働組合」も、極めて穏健な団体にならざるを得なかった。組合そのものも1921年ごろには自然消滅状態となった。1924年には「呉官業労働海工会」という新しい組織が生まれ、これには工廠労働者のほぼ全員が加入していた。しかしながら、実態的には工廠当局の厳しい管理のもとに置かれており、とても自由な組合活動ができる状況ではなかったのである。

戦前期、日本の工場においてバレーボールは女子工員のレクリエーションスポーツとして普及した。バレーボールは、適度な運動として、女子工員が生産能率を上げるために導入されたものであり、日本では「女子に向けたスポーツ」とされていた。だが、呉海軍工廠バレーボールチームは、戦闘的で「男らしい」バレーボール文化を生み出し、全国の競技大会でも輝かしい成績をおさめていた。一方で、「男らしい」バレーボール文化の隆盛は、呉海軍工廠内での「労働運動の低調さ」ともパラレルな関係にあった。すなわち、そこには「男らしい」スポーツ文化と、支配階級に従順な労働者階級の文化が、同時に存在していたのである。

(6)工場体育に関する先行研究は、いわゆる戦前の「ナショナルリティ」に焦点をあてたものが多い。それに対して本研究では、「ジェンダー」(繊維工場と海軍工廠)の比較や「社会階層」という問題意識をもちながら、実証的な分析を進めた。国内におけるインパクトもさることながら、最終的な論文は英語で執筆している。その意味で国際的なインパクトを期待している。

(7)資料収集を進めていく中で、戦後の家庭婦人バレーボールに関する貴重な資料を発見することができた。偶然の産物ではあるが、「社会体育」「ジェンダー」「社会階層」という意味で、本研究のテーマと重複する部分が

多いと考え、このテーマに関する論考を発表した。今後の課題として、戦前の工場体育と戦後の家庭婦人バレーボールの連続性と断絶を明らかにしたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

高井 昌史、A Study on the Spread of Volleyball in Pre-War Physical Education in Factories- From the Perspective of Gender and the Labor Movement-, 社会学論集、査読無、桃山学院大学総合研究所、50巻1号、2016、(印刷中)

〔学会発表〕(計1件)

高井 昌史、社会体育とメディアイベント 戦後の家庭婦人バレーボールを事例として、日本スポーツ社会学会第23回大会、2014、於北海道大学

〔図書〕(計1件)

高井 昌史、ママさんバレーというメディアイベント、岩見和彦編、続・青春の変貌、関西大学出版部、2015、pp.48-78(総ページ数30)

6. 研究組織

(1)研究代表者

高井 昌史 (TAKAI Masashi)
桃山学院大学・社会学部・准教授
研究者番号：20425101